



人口減少社会と 地方都市の活力再生

108

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主 席
研究員



17
都市の景観を
考える

このスポーツの普及・振興という意味では、長野県は冬季の分野を除いて比較の後発であったことは否めない。

1978（昭和53）年、松本市を主会場に開催された初の夏季国民体育大会（夏季長野国体）に向けた選手の育成とスポーツの普及・振興も、閉幕とともに一担尻すばみとなったが、98（平成10）年の長野冬季五輪・パラリンピックの開催を機に、プロ野球独立リーグ、BCリーグの信濃グランセローズ、サッカーJ2の松本山雅FC、同J3のAC長野パルセイロ男子となでしこリーグ1部のレ

ディースチーム、プロバスケットボールB2リーグ西地区の信州ブレイブウォリアーズ、バレーボール男子のVC長野トライデンツ、ルートインホテルズ女子バレーボール部ブリリアントアリーズなど、多くのプロスポーツチームが県内を本拠地に誕生し、現在も輝かしい成果をあげている。

その一方で惜しむらくは、長野市立樫花中学校女子バレーボール部の部員不足による存続の危機と市有のボブスレー・リュージュ施設「スパイラル」の冬季製氷中止の決断という二つの事実である。

前者である樫花中女子バレー部にあつては、中学女子のバレーボール界においては、全国屈指の強豪として、全中（全日本中学選手権）で最多6度の優勝回数を誇る名門中の名門であり、昨夏も全国16強入りを果たした。

しかし、そこで活躍し引退した3年生を除くと現在の部員は3名と、地区の新人大会にもエントリーできなくなってしまうている。

その一つの原因は、同部監督である教諭の引退に端を発する。同教諭と前監督の二人三

脚による熱心な指導と実績は全国的にも知られ、県内外からも有力選手が「越境入学」で集い、全国強豪校の地位をほしいままにし、日本女子バレー界にも多くの逸材を送り出しているだけに、その影響は計り知れない。

後者の「スパイラル」は、アジア唯一の競技施設であり、市内はもとより浅川地区を中心とする住民も、長く愛着をもって運営し、守り育てた長野五輪のレガシーである。

しかし、折からの公共施設の適正化基準への適合には競技人口の少なさはもとより、維持管理を継続するにあつては、あまりに市民一人あたりの負荷が他の五輪施設に比べ膨大であることから断念という結論に至った経過がある。（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長